

妊婦の夫に対する情動的援助に関する研究Ⅱ

佐々木 和子¹

足立 智昭²

妊娠中の妻の夫に対して、妊娠・育児に関わるどのような情報を提供すべきかを検討することを目的にした質問紙調査である。対象は、産後およそ2ヵ月時の146組の夫婦であった。助産関連の専門書やマタニティ雑誌などでよく解説されている妊娠期、分娩期、産褥・育児期に関する情報を精選し（35項目）、それらの情報が夫に対しては役に立ったか、妻に対しては夫がその情報を持っていて役立ったかを尋ねた。その結果、初産群の夫は妻と比較して、35項目中32項目で統計的に有意に役立ったと評定しており、これらの情報が初産の夫が妊娠期から妻をサポートし、産後の育児を行う上で重要な役割を果たしたことが明らかとなった。これらの情報は、夫の実際の育児を円滑にするだけでなく、妻の育児への不安を軽減することにつながると推察された。

Keywords : 妊娠、出産、育児、夫、妻、サポート、情報

1. 目的

我が国の子育て支援の課題として、父親の育児参加の問題が指摘されて久しい。1994年の「エンゼルプラン」以降、国を挙げてこの課題に取り組んできたが、その施策の効果は必ずしも十分とは言えない。比較的新しい父親の家事・育児関連時間に関する調査によれば（内閣府男女共同参画局, 2017）、6歳未満の子をもつ父親の育児時間は、1996年18分、2001年25分、2006年33分、2011年39分、2016年49分となっている。この20年で、父親の育児時間は、30分ほど増加したことになる。しかし、母親の育児時間も増加しており、1996年163分、2001年183分、2006年189分、2011年202分、2016年225分となっており、母親の育児時間も20年間で62分増加しているのである。これでは、父親の育児参加によって母親の育児の負担が減ったとは言いがたい状況である。

ではなぜ、我が国においては、北欧の国々のように、夫婦で平等に育児を担当できないのであろうか（舞田, 2016）。その理由として、男性雇用者の労働環境が改善しないことが大きな要因と考え

られるが（黒田, 2009）、その他の要因として、妻の妊娠、出産、その後の育児に対する夫の理解が乏しいこと、また、夫としての役割を遂行する上での自信に乏しいことなどの要因があることが推測される（佐々木・足立, 2015）。実際、中央調査社（2012）の「父親の育児参加に関する世論調査」によれば、育児参加の割合が低い理由として、およそ25%の夫が「育児の仕方がよくわからないから」と回答し、この割合は約20年前（1999年）の初回調査と比較してもあまり変化が見られていないのである。

また、このように夫の育児に対する認識の変化が、実際の育児時間に反映しない理由は、社会的認知理論の一つであるコントロール理論（Carver, 1979; Carver & Scheier, 1982）によって説明することができる。この理論は、現状と目標とする理想との間に不一致がある場合、その不一致を解消する知識や自信が乏しい場合、具体的な行動が発現しないと説明する。つまり、夫は、妊娠した妻、あるいは出産した妻にとって、良きパートナーとなること、また、育児に積極的な父親となることを目標としている。しかし、夫、とりわけ、初めて父親になる夫は、育児や妻を理解するための知識、夫の役割の変化に関する知識に乏しいために、

1. 国立看護大学校

2. 宮城学院女子大学教育学部

目標と現状の間に大きな不一致を知覚している。この知覚は、夫に対して、低い成功期待、自信の低下をもたらし、その不一致を解消するための行動の発現が妨害されると考えられるのである。その結果、目標と現状の間に大きな不一致は解消されず、妻に対する有効なサポート、積極的な育児行動が発現されないと考えられるのである。

したがって、夫に対して、妻の妊娠や出産、あるいは育児に関する知識、あるいは、夫の役割に関する知識を客観的で記述的な情報として提供できるならば、彼らの行動の発現を阻害している要因を取り除き、彼らの妻へのより有効なサポート、より積極的な育児行動を導くことが出来ると仮定される。

そこで、佐々木・足立 (2015) は、夫に対して、妊娠・出産・育児に関わるどの情報を提供すべきかを検討することを目的にした質問紙調査を実施した。関連する情報35項目について、夫にはその情報を知りたいと思う程度を、妻にはその情報を夫に知ってほしいと思う程度を4件法で評定を求めた。その結果、夫は初産群、経産群ともに妻より「胎児の成長」、「胎教」、「妊娠中の栄養」、「妊娠中の異常と対処法」、「出産準備」、「出産法」、「分娩中の異常」などの情報や、「産後の異常」、「赤ちゃんの病気」など緊急時の対応および「利用できる社会的制度」などへの情報的ニーズが高く、初産群の妻は、「育児の方法」「育児費用」、経産群の妻は、「里帰り分娩や出産場所」、「不妊治療と妊娠・出産」、「出産費用」など、出産や育児に関するより現実的な情報を夫に知ってほしいと考えていた。

そこで、本研究では、佐々木・足立 (2015) の調査対象となった夫婦に対して、子どもの出産後、夫に対してはどのような情報が役立ったか、妻には夫が持っていたどのような情報が役立ったかを調査することを目的とする。夫が妻をサポートする上で役立った情報は何か、また、妻が夫にサポートしてもらった上で役立った情報とは何かを明らかに出来れば、夫が妻に対する理解を深め、有効なサポートを学ぶための支援プログラムの作成が可

能になると考えられる。

2. 研究方法

(1) 対象

特定の地域や施設に偏らないように配慮し、年間分娩件数が概ね500件以上と公表されている全国の周産期医療施設のうち133施設の看護部長と関東地方の助産師会A支部に研究調査協力を依頼した。協力への承諾が得られた16周産期医療施設とA助産師会支部所属9助産所の各責任者に質問紙の取次ぎを依頼した。

(2) 調査期間

産後の調査期間は平成22年5月から12月であった。

(3) 手続き

調査は自記式質問紙法とし、助産関連の専門書やマタニティ雑誌などでよく解説されている妊娠期、分娩期、産褥・育児期に関する事項を精選し、35項目から成る質問紙を作成した。表1にそれらの項目を示す。夫には、その情報が「5：とても役に立った」、「4：ある程度役に立った」、「3：あまり役立たなかった」、「2：役立たなかった」、「1：その情報は持っていなかった」の5件法で評定を求め、妻には、夫が持っていたその情報が「5：とても役に立った」、「4：ある程度役に立った」、「3：あまり役立たなかった」、「2：役立たなかった」、「1：その情報は持っていなかった」で評定を求めた。

産後・育児期調査は、各調査施設のスタッフおよび一部研究者が、概ね産後2ヵ月後、郵送法で行った。その調査協力参加への意思表示は、妊娠期調査票の返送時に再度文書によって得るようにした。また質問票と協力の諾否の文書は、別途に投函できるようにし、調査協力の自由性へ配慮した。回答は夫婦で相談しないよう、個別の封筒での投函を依頼した。

(4) 倫理的配慮

対象者には研究説明書で、研究参加のお願い、研究方法、自由意志と撤回の権利、不利益の回避、個人情報の保護および研究成果の取り扱いを説明、

表1 初産群の夫と妻の平均値の比較

質問項目の内容	夫初産群			妻初産群			自由度	t値	p値
	平均年齢			平均年齢					
	人数	平均値	SD	人数	平均値	SD			
妊娠期項目									
1. 妊娠中の妻の体の変化	91	4.10	0.96	92	3.10	1.40	161	5.66	0.000 #
2. 妊娠中の妻の心の変化	92	3.89	1.14	92	2.80	1.43	174	5.69	0.000 #
3. おなかの中の赤ちゃんの成長	91	4.29	0.85	92	3.15	1.41	149	6.59	0.000 #
4. 胎教	91	3.27	1.13	90	2.81	1.44	169	2.41	0.017 #
5. 妊娠中の栄養	91	3.84	0.99	93	2.95	1.42	165	4.94	0.000 #
6. 妊娠中の快適な過ごし方	91	3.85	0.99	91	3.42	1.33	166	2.47	0.014 #
7. 妊娠中の協力の仕方	92	4.08	0.80	93	3.75	1.28	155	2.06	0.041 #
8. 妊娠中のセックス	91	3.14	1.25	92	2.97	1.43	178	0.88	0.379 #
9. 里帰り分娩や出産場所の決め方	92	3.37	1.30	93	2.78	1.52	179	2.81	0.006 #
10. 妊娠中に起こりやすい異常と対処法	92	3.61	1.24	92	2.61	1.48	177	4.96	0.000 #
11. 妊娠中にかかる費用	92	3.74	1.16	93	2.85	1.59	168	4.36	0.000 #
12. 高齢と妊娠・出産	92	3.17	1.46	93	2.30	1.48	183	4.04	0.000
13. 不妊治療と妊娠・出産	92	2.86	1.52	92	2.18	1.47	182	3.06	0.003
出産・分娩期									
14. さまざまな出産法	92	2.93	1.30	92	1.84	1.16	182	6.05	0.000
15. 夫立会い分娩	92	3.97	1.08	93	3.54	1.36	175	2.37	0.019 #
16. お産の仕組みと経過	91	4.03	0.97	93	2.96	1.48	159	5.84	0.000 #
17. 出産準備	91	3.96	0.97	93	2.77	1.37	166	6.78	0.000 #
18. 出産にかかる費用	92	3.87	1.02	92	2.92	1.56	157	4.86	0.000 #
19. 帝王切開	91	2.87	1.36	91	2.08	1.35	180	3.94	0.000 #
20. 分娩中に起こりやすい異常	91	3.29	1.20	93	2.05	1.34	181	6.57	0.000 #
産後・育児期									
21. 産後の妻の体の変化	91	3.70	1.22	93	2.72	1.43	179	5.02	0.000 #
22. 産後の妻の心の変化	91	3.66	1.25	93	2.94	1.41	180	3.68	0.000 #
23. 赤ちゃんの名前のつけ方	90	3.84	1.14	93	3.90	1.27	181	0.33	0.742
24. 母乳育児	90	4.06	0.83	91	2.69	1.46	143	7.75	0.000 #
25. 産後に起こりやすい異常と対処法	90	3.48	1.19	93	2.16	1.32	180	7.08	0.000 #
26. 産後のセックス	89	3.06	1.27	93	2.58	1.46	179	2.35	0.020 #
27. 赤ちゃんの成長・発達	90	4.13	0.91	93	3.42	1.38	160	4.14	0.000 #
28. 育児方法（お風呂の入れ方など）	90	4.36	0.69	93	3.59	1.45	133	4.58	0.000 #
29. 赤ちゃんの病気とその対応	89	3.46	1.25	92	2.60	1.45	177	4.28	0.000 #
30. 離乳食	86	2.59	1.40	82	1.50	1.03	156	5.77	0.000 #
31. 育児にかかる費用	87	3.10	1.45	93	2.55	1.52	178	2.51	0.013 #
32. 上の子の扱い方	82	1.88	1.28	76	1.20	0.63	120	4.28	0.000 #
33. 諸届け（出生届など）	89	3.99	1.06	92	3.67	1.42	168	1.69	0.093 #
34. 活用できる諸制度（育児休業など）	89	3.99	1.06	93	3.04	1.57	172	3.50	0.001 #
35. 妻の職場復帰と育児サービス	84	2.63	1.40	88	1.84	1.40	170	3.70	0.000

等分散を仮定しない場合のt検定

書面による同意書でその回答を得た。なお、国立国際医療研究センター倫理審査委員会の承認後、さらに各協力施設の指示に従いそれぞれ倫理審査委員会の承認を受け実施した。

4) 解析方法

データ分析には統計解析用ソフトSPSS 21.0 for Macを使用した。

3. 結果

1) 回収率

産後・育児期調査は、承諾が得られ郵送した質問紙数は189組、回収数は146組（回収率77.2%）であった。

2) 分析

初産群の妻と夫の平均年齢は、それぞれ31.8歳（SD=5.2）、33.5歳（SD=6.1）、経産群の妻と夫の平均年齢は、それぞれ33.4（SD=4.1）、35.0歳

表2 経産群の夫と妻の平均値の比較（有意差の得られた項目のみ示す）

質問項目の内容	夫経産群			妻経産群			自由度	t値	p値
	平均年齢			平均年齢					
	人数	平均値 (SD 4.67)	SD	人数	平均値 (SD 3.87)	SD			
妊娠期									
1. 妊娠中の妻の体の変化	50	3.62	1.26	49	2.61	1.46	93	3.59	0.001 #
2. 妊娠中の妻の心の変化	50	3.62	1.26	49	2.59	1.51	93	3.67	0.000 #
3. おなかの中の赤ちゃんの成長	50	3.98	1.04	48	2.52	1.41	86	5.80	0.000 #
4. 胎教	50	2.66	1.35	49	1.84	1.30	97	3.09	0.003
5. 妊娠中の栄養	50	3.38	1.29	48	2.08	1.38	96	4.80	0.000
6. 妊娠中の快適な過ごし方	49	3.59	1.14	48	2.98	1.48	88	2.28	0.025 #
7. 妊娠中に起こりやすい異常と対処法	50	3.60	1.11	48	2.10	1.34	91	6.01	0.000 #
8. 妊娠中にかかる費用	50	3.72	1.20	47	2.62	1.57	86	3.88	0.000 #
9. 高年齢と妊娠・出産	49	2.98	1.41	48	1.54	0.92	83	5.97	0.000 #
10. 不妊治療と妊娠・出産	49	2.39	1.40	47	1.30	0.75	74	4.79	0.000 #
出産・分娩期									
11. さまざまな出産法	49	2.76	1.47	48	1.65	1.12	90	4.19	0.000 #
12. 夫立会い分娩	49	3.78	1.16	49	3.02	1.56	89	2.72	0.008 #
13. お産の仕組みと経過	49	3.78	1.16	48	2.42	1.40	91	5.21	0.000 #
14. 出産準備	50	3.86	1.01	47	2.53	1.35	85	5.46	0.000 #
15. 出産にかかる費用	50	3.52	1.28	48	2.73	1.47	93	2.84	0.006 #
16. 帝王切開	49	2.61	1.38	48	1.44	0.94	85	4.90	0.000 #
17. 分娩中に起こりやすい異常	49	3.16	1.33	48	1.67	1.12	95	6.00	0.000
産後・育児期									
18. 産後の妻の体の変化	48	3.48	1.17	49	2.47	1.38	93	4.29	0.000 #
19. 産後の妻の心の変化	48	3.35	1.33	49	2.47	1.42	95	3.17	0.002
20. 母乳育児	49	3.73	1.20	49	2.73	1.44	93	3.73	0.000 #
21. 産後に起こりやすい異常と対処法	48	3.15	1.32	48	1.67	1.10	94	5.97	0.000
22. 赤ちゃんの成長・発達	49	3.90	1.01	49	3.27	1.41	87	2.56	0.012 #
23. 赤ちゃんの病気とその対応	48	3.83	1.02	48	2.83	1.40	86	4.00	0.000 #
24. 離乳食	48	3.38	1.16	47	1.98	1.33	91	5.46	0.000 #
25. 育児にかかる費用	47	3.34	1.32	47	2.72	1.58	89	2.05	0.043 #
26. 妻の職場復帰と育児サービス	48	2.81	1.44	48	1.67	1.16	90	4.30	0.000 #

等分散を仮定しない場合のt検定

($SD=4.9$) であった。

まず、初産の夫群、妻群のそれぞれの平均値の比較をt検定で行った。得られた結果を表1に示す。有意差が得られた項目は、妊娠期12項目、出産・分娩期7項目、産後・育児期13項目であった。また、これら全ての項目において、妻群よりも夫群で平均値が高かった。

次に、経産の夫群、妻群のそれぞれの平均値の比較をt検定で行った。得られた結果を表2に示す（以下の表においては有意差のあった項目のみ示す）。有意差が得られた項目は、妊娠期10項目、出産・分娩期7項目、産後・育児期9項目であった。また、初産群と同様に、これら全ての項目において、妻群よりも夫群で平均値が高かった。

さらに、初産と経産の夫群を比較すると、前者

の方が後者に比較して、妻群よりも有意に役立ったとする項目が多かった（前者が32項目、後者が26項目）。そこで、初産群、経産群の夫群の評定平均値の比較をt検定で行った。その結果を表3に示す。この表が示すように、35項目7項目で有意差が得られ、「上の子の扱い方」の除く6項目で、経産群より初産群の平均値が高かった。

一方、妻群について同様の比較を行ったところ、表4に示すように、35項目中12項目で有意差が得られ、「離乳食」、「上の子の扱い方」、「諸届け」を除く9項目で経産群より初産群の平均値が高かった。

表3 夫の初産群、経産群の平均値の比較（有意差の得られた項目のみ示す）

質問項目の内容	夫初産群			夫経産群			自由度	t値	p値
	平均年齢			平均年齢					
	人数	平均値	SD	人数	平均値	SD			
妊娠期									
1. 妊娠中の妻の体の変化	91	4.10	0.96	50	3.58	1.21	83	2.61	0.011 #
2. 胎教	91	3.27	1.13	50	2.66	1.35	87	2.74	0.007 #
3. 妊娠中の栄養	91	3.84	0.99	50	3.38	1.29	81	2.17	0.033 #
4. 妊娠中の協力のしかた	92	4.08	0.80	50	3.60	1.16	75	2.59	0.012 #
産後・育児期									
5. 産後のSEX	89	3.06	1.27	49	2.49	1.42	90	2.33	0.022 #
6. 育児方法（お風呂の入れ方など）	90	4.36	0.69	49	4.06	0.92	137	2.12	0.035
7. 上の子の扱い方	82	1.88	1.28	49	3.71	1.28	129	7.96	0.000

等分散を仮定しない場合のt検定

表4 妻の初産群、経産群の平均値の比較（有意差の得られた項目のみ示す）

質問項目の内容	妻初産群			妻経産群			自由度	t値	p値
	平均年齢			平均年齢					
	人数	平均値	SD	人数	平均値	SD			
妊娠期									
1. おなかの中の赤ちゃん（胎児）の成長	92	3.15	1.41	48	2.52	1.41	138	2.51	0.013
2. 胎教	90	2.81	1.44	49	1.84	1.30	137	3.95	0.000
3. 妊娠中の栄養	93	2.95	1.42	48	2.08	1.38	139	3.46	0.001
4. 高年齢と妊娠・出産	93	2.30	1.48	48	1.54	0.92	134	3.74	0.000 #
5. 不妊治療と妊娠・出産	92	2.18	1.47	47	1.30	0.75	137	4.72	0.000 #
出産・分娩期									
6. 夫立ち会い分娩	93	3.54	1.36	49	3.02	1.56	140	2.04	0.043
7. お産のしくみと経過	93	2.96	1.48	48	2.42	1.40	139	2.09	0.038
8. 帝王切開	91	2.08	1.35	48	1.44	0.94	126	3.25	0.001 #
産後・育児期									
9. 産後に起こりやすい異常と対処法	93	2.16	1.32	48	1.67	1.10	112	2.36	0.020 #
10. 離乳食	82	1.50	1.03	47	1.98	1.33	78	2.13	0.036 #
11. 上の子の扱い方	76	1.20	0.63	49	3.96	1.12	68	15.75	0.000 #
12. 諸届け	92	3.67	1.42	48	4.23	1.19	138	2.31	0.022

等分散を仮定しない場合のt検定

5. 考察

分析対象とした夫婦146組は、東北、北陸、関東、関西、九州、四国地区に居住し、16の周産期医療施設、9助産所のいずれかに通院している、偏りの少ない対象である。

本研究は、妻の出産後、概ね2ヵ月が経過した夫婦を対象として、夫が妻をサポートする上で役立った情報は何か、また、妻にとって夫が持っていた情報が何が役立ったかを明らかにすることを目的とし、なるべく国内の広範囲に住んでいる対象を調査対象に選んだものである。

まず、初産の夫群と妻群の比較では、夫群は妻群よりも、表1に示す35項目中32項目で有意に

役立ったと評定した。この結果は、妻が思う以上に、夫の方がこれらの項目が役立ったと認識していたことを示すものであり、これらの項目が夫が妻をサポートする上で必要不可欠な情報であったことを示唆している。佐々木・足立（2015）は、妊娠期の夫婦を対象として、表1と同じ35項目について、夫はどの情報を知りたいか、妻は夫にどの情報を知ってほしいか調査を行っている。その結果、夫群は、「産後に起こりやすい異常と対処法」、「赤ちゃんの病気とその対応」、「活用できる諸制度」、「諸届け」など、いわば産後に異常が生じた時や赤ちゃんが病気をした時など緊急時の対応や、「活用できる諸制度」、「諸届け」など、産後・

育児期の社会的制度に関する情報にニーズが高いこと、また妻群は、「赤ちゃんの名前のつけ方」、「育児方法」、「育児にかかる費用」、「上の子の扱い方」など、子どもの育児に直接関わる具体的な情報にニーズが高いことが明らかとなっていた。しかし、産後の夫婦を対象とした本研究では、そのような夫婦間の差異は認められず、上記のように一貫して夫群の平均値が高かった。これらの結果は、産後の場合、妊娠期には夫のニーズが高かった情報も、妻のニーズが高かった情報も、いずれも夫にとっては役立つことを意味していると考えられる。

次に、経産の夫群と妻群の比較では、夫群は妻群よりも、表2に示す26項目で有意に役立つと評定した。初産の夫婦の結果と比較すると、有意差の得られた項目は6項目少ないが、経産群においても、妻が思う以上に、夫の方が役立つと認識していた項目が多いこと示すものである。上述の佐々木・足立(2015)の妊娠期の研究では、経産の夫婦も初産の夫婦と同様に異なるニーズが見られたが、産後の夫婦では初産の夫婦同様、一貫して夫群の評定値が高かった。これは、経産であっても、妊娠期には夫のニーズが高かった情報も、妻のニーズが高かった情報も、いずれも夫にとっては役立つことを意味していると考えられる。

さらに、夫群の初産、経産の比較では、7項目で有意差が得られ、6項目で経産群より初産群で平均値が高かった。経産群で平均値が高かった項目は「上の子の扱い方」であり、すでに子どもがいる経産群でニーズが高かったことは当然であろう。なお、佐々木・足立(2015)の妊娠期の研究では、夫群の初産と経産の比較を行ったところ、35項目中29項目で有意差が得られ、いずれの項目も、初産群の値が経産群の値を上回っていた。妊娠期においては、初産群の夫の方が明らかに妊娠、出産、育児に関する情動的ニーズが高かったが、産後ではそれほど大きな差異はなく、経産群の夫は妊娠期にニーズの低かった情報も、産後には役立つことが示唆される。

同様に、妻群の初産、経産の比較では、12項

目で有意差が得られ、9項目で経産群より初産群で平均値が高かった。経産群で平均値が高かった項目は、夫群と同様「上の子の扱い方」、および「離乳食」、「諸届け」であった。経産群は、2人目、3人目の出産となることから、夫がこれらの情報をもつことが、初産の時以上に役立っていることが示唆される。なお、佐々木・足立(2015)の妊娠期の研究では、妻群の初産、経産の比較では35項目中20項目で有意差が得られ、1項目(「上の子の扱い方」)を除き初産群の値が経産群の値を上回っていた。夫群と同様、妊娠期においては、初産群の妻の方が夫に知ってほしい情報のニーズが高かったが、産後は役立つという点においては、初産、経産で差が少なくなったことが示唆される。

以上のことから、本研究で精選した妊娠期、分娩期、産褥・育児期に必要なとされる情報は、初産、経産にかかわらず、概ね夫に役立っていたと考えられる。また、これらの項目には、妊娠期の調査では夫のニーズが必ずしも高くない項目も含まれているが、産後の夫の評定からは役立つことが推察される。また、産後は、妊娠期と比較すると夫の初産群と経産群の情動的ニーズに差異が少なく、いずれの情報も役立つと推察される。また、これらの情報は、夫の実際の育児を円滑にするだけでなく、妻の育児への不安を軽減することにつながることを期待される。

参考文献

- 1) Carver CS. (1979) A cybernetic model of self-attention processes. *J Personality Social Psycho*, 37, 1251-1281.
- 2) Carver CS, & Scheier MF. (1982) Control theory: a useful conceptual framework for personality-social, clinical, and health psychology. *Psychol Bull.* 92, 111-135.
- 3) 中央調査社 (2012) 「父親の育児参加に関する世論調査」, 中央調査報, 659 (<http://www.crs.or.jp/backno/No659/6592.htm>. 2019年1月28日)
- 4) 黒田祥子. 日本人の労働時間は減少したか?—1976—2006年タイムユーズ・サーベイを用いた労働時間・余暇時間の計. 東京大学社会科学研究所, 2009, ISS Dis-

cussion Paper Series j-174.

- 5) 舞田敏彦 (2016) なぜ、日本の男は世界一家事をやらないか. プレジデント・ウーマン 2016年6月号 (<https://president.jp/articles/-/20569>, 2019年1月28日)
- 6) 内閣府男女共同参画局 (2017) 「男性の育児・家事関連時間」 (http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hy-ouka/k_42/pdf/s1-2.pdf, 2019年1月28日)
- 7) 佐々木和子・足立智昭 (2015) 妊婦の夫に対する情報の援助に関する研究. 母性衛生, 55, 300-308.